丑編
二
へ13
3567
22

門へ13
號 3567
巻 22

早稲田大學図書館
昭34.6.3
藏書

新局面石童子訓巻之四上冊

東都　曲亭主人口授編次

第十七回

成勝通能遊歴して東路ふ赴く
晴賢松下ふ睡てく蚺蛇ふ呑る

その時九四郎ハ柴六が陳じゆる財嚢のゆとうちゆて沈吟じて且ハ考ふ雪が如く朱之丈が汝と挑争ふ折財嚢の金と遞與さどとそ後方遥ふ投遣けるふ照月猛可ふ雲隱れして四下暗くるりーとハへ。その折朱之丈の支黨の躯居ける者ありて。金子ょ小石と入易くる狡是も亦知るべくもとハ思へども倘果して支黨の所為るふ。徑ふ財嚢と掻攫ひて逃も躯もまべ為ふ人と欺く便直のそ。金子ふふ石と入易くるハ何ぞの意ぞ解ぎがくると詞急迫く論ぎれば落葉も岩ゝ樵禁ゆそ九四郎刀祢閤ゆ。开ハ左まれ右もれ素よる那金三百両ハ。朱之丈の為ふとそ調

へく遽與ゑーふ非如所要と果さぞとも又他ゞまふ入りてゝ断縁金と思んの惜
くもあらぎか。故何とゞゝ他が主君より與り来る沙金八二十一包残りて俺家ふあ
マーと如如来様の示教ふよりて梅雪信女の柩と共ふ六田の河邊ふ葬めさもーハ那
作佛の志願ふ因る。そも朱之丞の為ゑれども其沙金と那圓金と交易ふあて
と思へいよく後安ゑりたと論せば九四郎うち笑ひて斉ハ只是婦人の仁のゝ佛意
然もあるべ。ゑれども朱六が憂ふ那金子をこり復さんとそ反ゝ金子と失ふく其
財嚢とのゝそ来ふければ鄙語ふ曰ふ璧と返して櫃を留む者ふ似ゝ倘他
人をのく是をいで朱六ふも疑いるたふあらぎ然ば件の百九十五金八咱ゞ必贖
ふべ。といへと落葉ハゆあへぎ。そハ又要ゑ理論へ俺世帯とある讓らと思ふ御
身ゞふ那金子と贖ハせて何ふせん他人がまたのゝゝハ似げゝゆえ為るかと論
まを九四郎推復して猶云云と論ぎるを杜四郎諫てゝゝ其義八今宵ふ限る

べゝゝぎ。寝床ゑれハ酷く深ゝ明日又商量あゆかーと云ふ乙藝も共信ふ良人名
る言果て落葉と納戸へ案内をゝれば朱六ゑ兄の意見の理りゝふ感服ゑく
重て復を詞もゝく咱ゞハ店ふ寝宿人とて帰ゝとて来く掃ゝども乙藝ハ
勤しふ臥薪嘗胆ゝ三所へ配る三張の幔垂て各枕ふ就ゝけり恁而其詰朝十二
屋の炊喜柳工ゞハ乙藝が赦ふあひ一夜九四郎も恙ゝく帰郷のうゝ少知て早
旦ふ久ゝ来ふれば新水の事ふ其人あり。早飯既ふ果ーかば九四郎ハ落葉乙藝杜
四郎朱六ゞと皆納戸へ招取水へて又只昨日の金子の夜を情やふ談ぎたゝ上
市の奴々ゞゞ那一百九十五金八其盗児と知りゝゝ復ーゆゝ有へ朱六が
憂ゝふ御身ハ慈善の心ゝく朱之丞ふ返ー遣ゆと思へ惜ゝゝと宣ひ一俺ゝ
くゞゞゝあらぎと銭財のゝハゝも親ーゝ中ゝも言品出来て迷ふ疎く做る者あり況
任侠を磨く者ハ授受明白ゝ成れば乾児假子も従ハぎ何をあてよく人を制せん

なの故に朱六が失ふたる一百九十五金の内中俺百金を贖ふて目今御身に返しもすべし。といふを落葉ハ推禁めて、卉ハ又御身の一徹なるぞや。昨宵ならバ
るぞかし。杣木の家を嗣せんと思ふ御身の損被て其百金を受られんや。況那金子ハ
亡くなれる朱六刀祢の怨欲怨なる反故俺が親俺渡さし財嚢なる孫へ那子を
咎るハ無理なるべし。人の失ねると失ふとハ皆是時運に由ると秋ゆ日只ち捨く措
かれねと言叮嚀に諭せども、九四郎听ず頭を掉て、卉ハ辱れど御心ながら人の養嗣
たる者ハ其家に益あらで減も支なる様れあらバ其養嗣する甲斐なき然るを
今俺們夫婦ハ小弟の所以とむかしからいまゝ養家に贅られて養母に一百九
十五金の損をしも被らんず誰か益ある者といふべき然るを剝那金子の内中御
身百両ハ絶借して朱之介に遮與しかどもならぬや其金子ハも今返さゞれバ
守の御善政を空にしまする単御身のみならず俺も亦百金の債ある者に似

たり。必な推辞なひそと義を見て勇む侠気に、落葉ハ竟に争難て、又いふよしも
なかりけり。当下九四郎ハ懐なる長財嚢より金二包を拿出して、四郎朱六等に
向ひていふやう、昨日も既に告し如く、這金二百両ハ治比の大人と公の賜なれバ、内中
五十金ハ四郎腋子へ、五十金ハ朱六へあたへ武者修行の路費にせよとて取せぬ所へ
又五十金ハ子孟林寺へ布施とすべく、五十金ハ俺九四郎へ賜ふ物、即是へ足なれバこそ
俺五十金と朱六の五十金と合して、百金ハ目今乙芸が奶々に返して、那債を
贖ふべし。猶九十五金足らねども、卉ハ奶々の慈善なる那沙金と交易に朱之介に
取せんと思へバ恨ハあらじ。勿論朱六が路費ハ俺別に調へて、起行祈に遮與
ましべし。四郎腋子の五十金ハ目今渡し参らせてんといふを、杜四郎推禁めて、否其金
子をいそくハ要なし。啓行の日にても好。勿論俺們二人が修行の路費ハ五十金にて
足りぬべし。逆旅に財貨多なるハ是禍を招くに庶幾と辞へバ、朱六も俱に

昨宵咱ぐごろ復一る。財嚢ハ反て孔と破りて斯まで劬労と被せるハ心苦
あれ涯り多ふ何でふ路費を欲まへ術ふく計ひ給ね。と勧解れば九四郎熟頭て。
然でハ商量整を可。そなたの方も先一包の金子を含て故の如く長財嚢ハ敛め
残る一包を傍ふ有ける團扇ハ載て卒とそ落葉ハ遽與まゆそ落葉ハ左右る
く受難て猶云云と辭へども九四郎敢て聚引も柔六も亦杜四郎も俱ふ薦めく
已ざれば乙甘藝ハ孰を孰とも分るよう多く慰難て心苦ーく思ふの。黙然とて
在りー程落葉ハ暫やく件の金子と受戴ぐ涙嗟て非如何とハるとも。
今這金子の情由さへ少てハ受べうハ思ねとも受ねば人の志ふ悖るとあるを爭何ハ
せん受ての後ふ左も右も又せんなこのあらぬべ。好意を戴ぐ侍り。乙藝宜く憑
そやと謝ーて財嚢へ件の金子を納めて項ふ掛る折ふ炊婢ぐ來て告を字ふ
上市る村長ハ今朝夙ふ落葉を踏く俟托て伴當二名を從へて且両個の

轎夫ふ落葉ぐ彷轎子を吊せ。索て十五屋へ來ふければ落葉ハ九四郎乙
藝と倶ふ遽ーく出迎て奥る坐席ふ請登ち。先茶と薦め果子を薦
む。主人夫婦ぐ初對面の口誼も稍果ー時落葉ハ村長ふ向ひて曰ふ。奴
家ハ今朝夙ふ歇店ハ還るべうーふ迎の便轎ハ仍ぐ來ぎ且奇事のありー
ぐ憶ぎ時を移ーぬ其故ハ箇樣々々と乙藝ハ實の女兒ぐーと迷ふ知ら
ぎ知らまぎ者く。環會ける崖畧を呼き告く又ふ是ぐの内縁ある
れば這夫婦を上市へ喚とて杣木の家と嗣せ。欲ある商量も有侍り
ぬ。の義を欲びぬかーと説れて村長ぐと拍鳴ーて吁芽生さる开ハ料らぎ
る此福人御身ぐ老実慈善ぐ多も是まで善報ハあらぐ朱刃祢の無頼ハ仍ぐ
ぐ斧柄少女の夭折を最悼く思ふーふ幼稚時ふ生別ち令愛夫婦ふ撥
會ぬーハ是則陰德陽報御身の慈善と薄命を神佛の憐ぬ利

益ふとゝあらんぞらめ。寔ふ賀ぶべしゝと祝しく九四郎乙藝ぞふ其欣びを舒ふけり。
當下落葉ふ又村長ふ談るやう。御身も知らぬ如く昨日陣館より返賜り
たる其金百九十五両と單奴家ぞ腰ふ纏ひて大和へ還らば重荷ぞ不便ふあそ
あらんぞらめ。這春御身ふ借用ある百金と返ーまるべー。御身も重擔るべけまど
這里ふて受含ぬ祢ゝとゐて財嚢を解開て金一包を含出て开ぞ儘
村長ふ返しゝ又のやう。利金ふ何だるゝ知らぞ給れどゐる本金のみふ給りとゐふ
村長含笑て件の金を受戴ゝ。懷ふ眼鏡を含出て拭く圓金の包を
開て。両三番數へ見つ。眼鏡外して懷る財嚢へ件の百金を楚と納め
初畳帖より證書二三通を含出しゝ甲乙と開て見つ其一通を落葉ふ返
やゝ。殘るを又懷へ夾めて落葉ふ向ひてゐやう。有斯るべーとハ知らねども陣館
ふて那金子の事をー問せぬうん狡と思ふだるふ證書を懷ゆて來ふければ授受

都て事濟ゐ。原那金子ハ山歳貢の積金をふて用達ゐれば利銀ハ決て欲らぞ。
夙く銷印ふぬゝ。とゐれて落葉ハ感謝ふ堪ぞ受戴ゝ。開て見て开ぞ儘
九四郎ふ渡ゝ。かば九四郎も亦是と讀見て。隨即乙藝ふ吟咐て鍬硯を含よ
せゝ筆を染々印信を抹く落葉ふ返しけり。當下村長ハ又落葉ふうち向
ひて御身ハ這回思ひ外ける。絶て久ゝ今愛ふ環會ぬゝ。ゝ猶所要ヨあるる
べー復來ぬえハ易からぬふ姑且止宿ふぬひね。咱ぞハ暇と稟ゝ。とゐて躰く
身と起ゝ。落葉ハ急ふ推禁めゝ奴家とそも人さふ留守と凭て來ふけ
るふ幾ゝ。ぞう這留ゝ。ゝ乙藝も九四郎も大和へ訪來る該ゐれば又逢がさ
ゝ別ふあらぞ。奴家ハ御身と共侶ふ今日晝起ふゝ退るべー。と次間ふ九四
郎ハ乙藝ぞふ吟咐る。銚子盃酒菜さ甲乙とるゝ安排て村長と落葉ふ
薦ける。迭の口誼献酬も。沙量るゝれば時と移さぞ更ふ准備の晝饌ゝ只

這席のもるゝを村長の伴當轎夫ども。歎待届ざる所多く各飽て辭ふ時。住吉の神社ゟ吹鳴ゝを午の貝の遠音遥ふ聞えけり。當下落葉ハ九四郎と乙藝と召て別を告れば。九四郎乙藝ハ留めあぐ。俱ふ異日と契りて出ぬ。切く猶両三日も留めまゐらまく思へども御一路人のあるゝふ人ふ任まる留守ハ宿の心許なゝと宜ハされば今ゝらふカ及ばぎ四郎楽六が起居と目送果しいづ藝と大和へ参らゞべ。時宜ふよりて九四郎も共伴ふと思ふる。一雲時の御別ふハ通路酷暑と凌ぎて後の便を俟ぬこれと言語齊一慰めて九四郎が家裏ふ安藝半紙幾十帖とも製の木櫛十枚有餘と土産ふとゞ轎夫ふ渡して轎子ふ容措きゝ又村長ゟハ土産料ふ一裏の人情ゝゝの餘伴當轎夫ゟ遂ゝ取ゝる裏銭ハ届ぬる郷食應ふ皆欽ざる者もるく告別さへ敬動めて草鞋と更て立程ふ落葉ハ今ゝゝ思ふ。いまくもれど嬉しゝと又悲しゝふ胸

窒りて詞寡く村長ふゝ續ぬて立出れば杜四郎と楽六ゝ孟林寺へかゝるゝふ。途まで是を送らんとゝ身装まて出て来ゝ。落葉村長ふ別を告く。轎子の後方ふ立程ふ九四郎乙藝と首ゟ炊婢も櫛工ゟも皆店頭へ立出く目送ふ栄ハ故郷へ飾るゝ秋の錦ゝらゞ冬樹の黄楊の櫛店舗ふ惜別ハ峯張の岐阻ふ異るる大和路も同ど山路を想像る。乙藝の小夏暑日ふ出しゝる親の轎子の見えぬまで莫れて立盡しゝて奥ふ入りける。徳而是日九四郎ハ六市四摠が来ゝるふ及びて昨宵よりゝ奇事を送もるく説示まゝ。六市四摠ハ駭嘆ゞ来之ゝ久と憎むる。日屬ふ倍て甚ゝく更ふ落葉の誠心と感じて莫しく思ひけり。左右ゝる程ふ未過時候ふ做ゝかゞ。九四郎ハ孟林寺へ詣んとて。這回安藝ゝりのて来ゝる。土産物一裏と伴當四摠ふゝ出るゞて。俱しく件の寺ふ赴て住持木丞ふ見参ゝ杜四郎と楽六も其席ふ伝らける。當下九四郎ハ木丞ふ拜面て

二賊一婦人夢ふ正覚を示を

この所の本文十丁の左りふ見えたり

治比丞とあり。大江弘元の病臥の日。且其口状を伝達して。寄進の金五十
両を。含み出て木垂に遁與りけり。是より先に木垂は杜四郎染六が父の事。言詳に
告しとりける。落葉乙藝親子の再會當晩朱之丞が潛來て。落葉の金百九十
五両を。竊含て走りて折染六が赶蒐て。含復奪ふ小石丞。財嚢に金二共
るるりーかべ。九四郎は已とそ。ぞ曩に弘元の那身と染六に賜りける。金子一百両を
のく。那失を贖ふて落葉に返さーるまでも既に少知りければ。又其父を出で。
意見を九四郎に示さまう。弘元主の病臥は。胸安からぎ思へども。老朽なる那
身をらぬに霜露の軽症なれば。久しかるべしと。就て那主の和殿
と染六に賜りける百金を。義侠の所以とはいひながら那贖に喪しは惜むべきの
るらぬや。夏の不便は是のみならず。染六の武者修行も和殿夫婦の大和へ行くに。
盤纏まうるべきなれば。故に俺今這五十金を和殿弟兄の餞別に含ませ

ぎとるを九四郎少あぐ。そは赤くはへども。治比の大人の布施なる金子を賜りそ
俗事に充なるを佛の箱を剝ぎに似たり。小可も然だりの貯禄のるるにあら
ず。其義を許さぬとれと。辞ぶ染六も倶に。豫知せぬる兄が氣質をは
へ受なるべくもあらぎるに。措せぬれと。執合まれば木垂は頭と左右にうち
掉く。然にあらぎる。這金子は弘元主の布施なれと。而少年は来當寺に
同伯の謝物にとあらぎるも然が今両少年の往方定めぬ武者修行に出
るを祝して餞別をせざらんや。約莫生家人なる者の銭を欲ぎは佛の
教に叛く。塵俗なるもあり。況今當寺は破損修復の費用なり。
徒に六の金子を藏めく賊難を怕んとは。今弟兄の路費に做さば弘元主の
素意にも稱ふて其利益莫大なるらん。然とも徒法師のるより。受ると厭慢
ぶ發跡て後年毎に三両まれ五両まれ徐に返さば貰ふあらぎ。非如俺なる

後人と。後住の為ふ反て益あり。枉く這意ふ任まて。と諭まつ件の五十金と。
幷ふ儘柴六ふ遽與ふ。柴六ふ受戴ふて。感謝ふ堪ず。杜四郎と。倶ふ其
歎びを陳て。九四郎を諫るふ。九四郎僅ふ頭を拾げく。師父の清談理に當
然。然でふ脱る。路ふ。權且借用仕らん。柴六ふ実を寫ず。とふと。木玄推
禁めく。いうでかふ。實ふ及ん。貸ふ俺心ふ。借るふ人の心ふ。縱數通のふ実ふ。
借て返さ。ふ争何ふせん。又一行のふ実ふ。返さ人ふ必返さ。況法師の物と
貸ふ其人と。疑んや。已ふ。ふく。とふと。掉ば。九四郎ふく感服て。師父の大量。今に
世の。出家人。実ふく。ふ。以取べ。取れば。廉と破る。以取。取ふ。ふ。取らざれば
惠と破る。と。孟子ふ。ふと。總角の時。讀て。と思ひ出る。ふ。俺ふ反て及ざりける。師
父も亦義士ふる哉。御意。美ふ。ひぬと。稱て。拜謝ふて。杜四郎ふ。
九四郎ふ。談る。ふ。咱ふ。家尊の大人の病臥を。傳ふ。其日より。千里の路も一

時ふ。走り。ふく。思へ。大人の消息。ふ。在り。ふ。ず。一功。ふ。ず。台地へ。入ふ
と。許さ。ず。然ば。今番の武者修行へ。故郷へ。還る。首途。一日も。速く。起ま
く。欲ふ。這義を。計ひ。ひ。ひ。と。ふ。を。九四郎。ふ。ち。ず。て。開ふ。理り。ふ。人。ど。も。一月半
稔の。逆路。ふ。ば。啓行。と。ふ。ど。も。ず。ず。幾。を。涯り。と。量。知られ。ず。宿。旅。ふ。去。向。ふ
そ。ば。要。ふ。三伏果て。孟蘭盆。ふ。そ。俟。ば。必。酸熱。醒く。朝夕。ふ。涼しかん。
其折。ふ。そ。ふ。起行。の。准備。と。そ。仕。ら。ふ。と。ふ。ば。ふ。く。先懐。より。圓金五十両。と。合る
出。て。是。と。杜四郎。ふ。遽與。て。ふ。ず。ず。柴六。も。ず。ふ。ば。主僕。の。盤纏。と。合。ま。と。ば。
正。ふ。是。百両。あり。馬轎。ふ。乗。ず。粗飯。と。厭。ず。旅宿。ふ。倹約。と。上。と。せ。ば。五
六。絵。ふ。在。ば。四郎。腋子。ふ。才子。ふ。俺。言。と。俟。ず。て。萬事。ふ。ろ。ふ。あ。べ。ど。も。
柴六。ふ。ふく。慎。ば。孰。の。郎。ふ。造。る。と。も。皆。敵地。の。思。ひ。と。做て。賊難。と。防。ぐ。べ。
色。ふ。惑。ず。慾。ふ。道。ず。れ。ず。才。ある。も。欺。ま。ず。愚。ふ。る。と。も。侮。ら。ず。主僕。心。と。一緒。ふ

まで。世の英雄と交りて功るゝに遇るべくして。其の義をあらるゝ人これと諭せば四郎も柒六も共侶ゝ感佩して。教訓道理至極せり。胆ゝ銘じて忘るゝ事遮莫百金ハ路費ゝ多くして。半分ハ留めて大和へ赴く所用ゝ做の人。とゝろく返して柒六の五十金と九四郎ハ辱ゝ鱠を推戻して。不日其金ハ治氏の大人と當寺の師父の和郎達へ餞別ゝ做さるゝゝ俺私ゝ用ひんや。益々とゝと宥めて。餘談ゝ及ぶ程ゝ木玄も其義を感じて。急ゝ堂より鳴して。木詩と呂よせて茶と看と果子と奉よとして。数待ち程ゝ没日刺風も涼しく做しかゝる九四郎ハ木玄ゝ教ひと。舒別を告ゝ四揔と別く遽しく家路と投ゝ退りけり。然れども熟云を是ら弓のゝを傳ゝて。あの日より四郎柒六が起居と自親も大和へ赴く准備ゝ衣の鮮洗して。襤褸刺せてゝ鳴虫ハ。ものゝ鳴れども縫刺ゝ暇ゝ。夏過て七月中旬ゝ做し時候又ゝ一の奇事あり。其故と原ゝゝ量裏ゝ浮世伐屋暖簾次ハ

鍛冶郎と今様の悪事ゝよりて罪と免ぜ。久ゝ獄舎ゝ繋ゝまて。駝鳥太吹五郎と共侶ゝ拷問緊しかりけれども。駝鳥太吹五郎ハ死と究めて。詐と人と誣ゝ。暖簾次が為ゝ直言して。他ハ鍛冶郎が。騙賊なりしと知るゝ。又今様が鍛冶郎の悪と幇助すると。暁らゝ。只目前の利ゝ惑ゝて。今様と貸ゝ。其悪意あるゝ。俺們素より是と知りぬと。陳じ数回の拷問ゝ。毛も言を変ざりければ。木工頭職善ハ竟ゝ其疑解く。七月の初旬ゝ暖簾次と獄舎より饒しして。家ゝ屏居在せり。左右まる程ゝ駝鳥太と吹五郎ハ那身ゝ刀瘡ある上ゝ数日の呵責ゝ其瘡破れて。遂ゝ破傷風ゝ做しかゝ。俱ゝ獄舎ゝ身を繋けり。其の故ゝ梟首せられ。職善下知して。件の両個の亡骸と。俱ゝ市ゝ棄てゝ。則暖簾次と。乳守の里長ゝと召よせて。みづゝ件の趣を云云と言ゝして。且公ゝ。暖簾次ハ鍛冶郎の悪事ゝ與せられども。今様と貸ゝる罪あり。這故ゝ

賄銅百貫文を献ぜそのて軍用ゐ充べ。又小槌の今様ゐ使れる両個の小袋打出の早歌丁児の調子ハ始より支の仔細を辨知らぎ且年二五未満の僮女れハ俱ゐ罪を饒きべ。と掟ら原。賞罰訓是ゆゑ果ゐけり。尓程ゐ十三屋九四郎ハ人の噂ゐ件の一義を少知りく感じて已ぎ悄地ゐ旃陀羅ゐ相譚ふく。駝鳥太吹五両個の屍骸を柩ゐ斂め是を早せて当晩孟林寺へ送り来て住持木玄と。杜四郎柒六木訥ぎちゐ六の義を告知らぎ。又ハ俺意ゐ低杭駝鳥太狸毛吹五郎ハ鐵屑鍛冶郎ゐ等ゝ尓ゐ強人れども。俱ゐ義侠の心ありけん最期の正念殊勝ぎ。其招ゐ敢善人を誣ぎ。ぎをりく。朱之丈を首ゐて乙瓶二六市四摠暖簾次ゐ至るまで。皆疑獄を免れり。我ゐ功ゐ。とせぎ。ぎの故ゐ俺慚思ゐ。いくぐ件の亡骸を當寺の境内ゐ葬らぎく欲ぎ。ぎの義を饒きせめべり。と憑めば木玄點頭く。俺も亦始より。那二賊の誘らぎ。と粗知れり。悪縁れども其亡骸を

葬る支ハ獣ゐからぎ。但墓所ぎハ憚ぎあり。門外ゐ藪蔭ゐ埋むべ。と饒ぎかゐ。九四郎随即旃陀羅ゐ課せて其地を深く穿せて両箇の柩を埋葬ゐ。沙弥木訥ぎ羨りて。安葬の讀経あり。木玄も立ぎく。是を引導ぎ。其次の日より。大江杜四郎。峯張柒六ぎ。為ゐ施主ゐ做て寺の門前ゐ石工ゐ課て無銘の五輪石塔婆を造立く。駝鳥太吹五郎の墓表ゐ表けり。又住持木玄ハ。那時より藏置く。今様ゐ頭髪言の杪を。他ゐ生前の願ひの隨意高野山骨堂ゐ斂んと。柿八ゐ吩咐て。寄進の黄白さへ齎し。紀伊國へぞ遣けり。左右ぎる程ゐ盂蘭盆會ゐ。ぎ。ぎ。ぎ。木玄ハ又近村ゐ僧徒をまく招會せて。駝鳥太吹五郎今様ぎ為ゐ施餓鬼の法會を修行ぎけり。是日も杜四郎九四郎柒六ぎ。又施主ゐ做て衆徒ゐ齋を薦めるとも。結縁の為ゐ参詣ぎ。老弱男女極めく多ぎ。既ゐぎ。法會果ぎ其夜分住持木玄の夢ゐ今様駝

鳥太吹五郎等が在り世の姿まで。倶に枕上に来て禀さまう。俺们二人は前世の悪業によりて。竟に其死然を汚ぎ。身と白及に串まれて。死しては地獄に隨べり。未に禪師大慈悲の引接によりて。解脱清果の洪福あり。極樂浄土に到ることを。ひとり疑ーくは是見ぬ人とは欲と思へば。倶に身を轉じて忽地三莖の蓮花に変ず。西に靡沈て失ふけり。當下木玄驚覚く。單其夏を思ふ有るも似なり無きも似ずと。折々鱗る上圭の音を。ゆゆ徐に數まべば正に丑の時ゆゑあるけり。其詰朝木玄八四郎柒六木訥等に這奇夢を説示せば駭歎せざるはなく。倶に佛法不可思議の妙要なを感じけるとの比丈住吉の里に今様とよく知りて居る者あり。九四郎に語道那今様は容止美ーく。心操も風流て平生に歌を好ミく詠ける。何ぞ折ぞありけん河竹の浮節敏系くて。夜毎に替る枕の數の定めなき世を果敢なきて。今宵誰が来てやはらん數ふの枕は知らぬ五月きさらぎ。有係る面

流せるとも。其心の惑ひを。深所宜ーからぬ。惜むべー。其生涯を謬ーい彼愚ゆて。此に賢人とやいふ。是に就て又一話あり。近曽東に隱沼と唱ふ僧ーて。才蘭ーる名妓の老て女僧に做りたるありけり。書讀ぬを好ミーかぬある人當春世に見れ出ぬ。細人の項言せる隨筆ぞの刻本をとて来て是見ぬとて貸ーられぬ受て是を讀見る程に其人又訪来て那書の好ぶを問ーかぬ隱沼の女僧答て父母ぞ已と知ぬる曲学者は忌憚所るく。人を人とも思はざりけん。孰是册子とぶを見るに。一書一説を信容れて古より人のとりて偽て。證文ヨヌる故事を誣ーるもあり。或は方位を論ぜるに今の曆日にも載さるぬ金神は將神みどと取るに足らぬとのーは過當の限言ーに抑方位のに近曽唐船の載来ぬる通書ヨヌる。術者の世俗を恐嚇ぬる者。豈只金神のみならず。倘方位の用捨を論ぜきく欲さば唐山る通書を繙く看破りて後に知べー。意に這編者は唐本るを讀うべくもあらず其実は

薄ハ聊る文と見ても知らる況卷と成るとや其考證ある條ハ竊ホ人の説と取て已ゞ説ホ倣せる多べ。又近曽高名家の戯墨ホ粗地名の辨あると酷く譏りて道灌の歌と證ホ為れと廻國雜記ホも證歌あると引き并と引ハ已ゞ説の窮を故文東鑑ホも證据あると知らぎーて。なろくゝ。うるけ〜みどの乙馬ハ怨ある故狩壁言ハ陳壽ハ諸葛武侯ホ舊怨ある故ホ蜀志の列傳ホ軍旅のハ拙しとそ。識ぎー心徹ホ同じ。とろんへ猶過ぐ。或ハ又孔子の言を引て論語と中庸とも何ぞ疎忽ある。人の非とゐまく欲さ光已と正しく詳ホまべ。這他珍説と思ひけん話も遼東の豚ホ似るのヨヌろ其文の杜撰る。假字づゝの孟浪るゞけるけれの天介遠波ぐも知らぎ。是ゐとと。なろくとも。うるさ。とも久べれそ。四卷ありけると。僅ホ二卷見て其似而非冊子と迄きとて。戯笑歌とみて遺ーける其歌。假字つゝ天介遠波ぐホも叨る。生まの者生著述哉又浅つきるゝけきも知らぎ人の非と。ゐつれゞ口の臭さよ。世ホかくの

如ぎ才女あれども其香臭ホ心つけるく只其形狀の似ると見て蕙ホ蘭の芝韮も。一草ゝと思ホヨヌるべ。めて辨ぎまいあるべ。とその心ける。ホを是後の説説ハ介程ホ。残る暑の悄退て七月二十日あまるホ欲りーゐ大江杜四郎成勝ハ柴六郎通能ハ武者修行の首途ホ心只管いそゐれて俱ホ吉日と擇ミつ。住持木玄ホ別ミを告て。身の暇ととーゐ木玄則其美と許して柿八ともて送らるホ柿八ハ高野山より既ホかへりて寺ホ在り四郎柴六ゐ為ホ呼要の袱包と駝もゐ引提もゐ十三屋まで從ゐくゐ。然ゐ水訥と首尾。同宿の沙弥ゐ別を惜ミて出て是と目送のけゐ是日亭午の比及ホ杜四郎柴六ゐ俱ホ十三屋ホ來ホれハ九四郎乙藝り豫ゐ准備て待て在り。柿八を労ふて晝飯と喫せるゐとして折乾ホ銭二緡と取せて寺ハ還ーー遣却。四郎と柴六ハ奥坐席ホ酒飯の儲ホ。萬里の首途を壽ホて去向の小心と教ホ誡。其ハの秋ハ九四郎も乙藝と俱ホ大和ゐくべ。とと。説ホーゐどもホ這席のゝゐ日暮

て其言葉を送ふ別を惜むのみ然りとてそもそも逆旅なるねど杜四郎と米六ち其ハ暁ふ
吸覚えて早飯果て俱ふ旅装を路費の金子を各勃肚ふ敏め或ハ肌衣の襟ふ
縫へ入るもあり杜四郎が両刀ハ那身ふ小り一時父弘元の賜りたる大江家傳の名刀
又米六が両刀ハ父通世が遺刀なる関の孫六なりける行裏重かるべ路の煩ひなれば
俱ふ身軽ふ打扮て油衣笠ふ外ふ所要ある袱包を背ふ者るのみ徒而其詰朝杜
四郎米六ら先京師ふ造んとて藝ふ年来愛顧浅からぬ一族を舒且別を告て
草鞋穿締て立出れば九四郎ハ六市四摠を従へてみづから浪速まで送りて竟ふ袂を分
ちけり是日杜四郎米六ら路を走る十二四里ふ至て又独く京都ふ来ふければ姑且這
里ふ旅宿をし日毎ふ歩て洛内洛外なる名所古跡を遊覧まて憶ふ秋を送る程ふ
当時近江なる観音寺の城ハ佐々木近江判官高頼在住まて六角殿と稱せらる其
家累世武功ヨリ多ふ大諸侯なりければ敏ふ昌西の都なる大内家の鶴峯ふこそ及ば

威勢室町殿にも憚らぬ既ふ獨立の思ひあり一ふ武藝ふ勝れ文学浪人多ふ那城
下ふ集合まて仕官を求る者少からぬ況城内なる諸臣ふ兵法陣列弓馬撃
剣槍棒白打ふ捷れる者ヨリとりどりなる杜四郎米六ら卒や是より先観
音寺の城下ふ赴く権且修行ふ做まるべ世の英雄豪傑ふ値遇まるもあ
るべしとそ遂ふ京師を立去て近江(西ノ方)ふ思ひ向ふ話分両頭小程ふ末朱之介
晴賢ハ落葉が財嚢の金を竊まて走りける其夜分峯張米六ふ追蒐られ件の
財嚢を奪ひ復まて僅ふ九四郎が取せる圓金五両を以てけれ共得足を盤纏ふ
まそ投て往方ハ定めなきもふ亦京師ふ来ふれども洛内ハ憚りあれば東山の邊なる
托る歇店ふ止宿まる。憶ふ三伏の夏の日と徒ふ送る程ふ単熟思ハ惟る大
和なる上市ハ空手ふ然りとそ這様ふ今ハ故郷ふ帰ると雖ども叔父房ふ便求めく周
防の山口ハ西ノ方なれば只近江国坂田郡福富村なる福富氏ハ舊縁あり那家ふ衰

近江の山路ふ朱之介蛇腹ふ葬らふ
朱之介

朱之介
早かりこらく

果てれども。黄金の母親阿鍵刀祢い賽武則で村盡処ふ。小店と開いて存りこ
ゝ。ゆ先や那里へ寄行て身の隠処ふ做さべや。と毎日くふ尋思ふ。是ゝ折々市
圓ふて。解洗ふる夏秋の敗衣と一尺五寸ふ成ふる。短中刀と買食て。聊身皮を繕
ふ。又阿鍵へ贈る。此の土産物と准備ふ。ゝかべ數日の宿銭と共ふ盤纏ふ憑ひ五枚の
圓金ふ残と絶ふ做り。ゝかど近江 伊國ふる。ものと吉足へ。と思ひて。其六月下旬ふ
東山ふる歇店と立去りて。單近江路ふ分入ふ坂田郡ふ殊さらふ。山又山ふ連りて去
て向ふ嶮岨ヨヌければ。朱之介ハ一日ふ。いまゞ福富村ふ造り。ゝ次の日も殘る暑ふ疲
果て山蔭ふる松の下ふ憩て憶ゞ睡。ゝ程ふ。忽地一箇の蚺蛇あり。太さ十圍ふ。
べく。長さ。いまゞ量知られゞ近ふ沼ふ見れ出て。松ふ攀りく朱之介を只一口ふ呑ふ
けり。畢竟這悪少年が大蛇の腹ふ葬まて後甚麽ぞや。開ハ下回ふ。

新局玉石童子訓 巻之四上冊 終